

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K10	氏名	藤平 いずみ
研究主題 —副主題—	中学校における特別支援教育コーディネーターを中心とした 通常の学級に在籍する生徒支援の在り方 —放課後学習支援教室を通して—		
所属校	武蔵村山市立第一中学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>平成15年の東京都の発表によると、都内小・中学校の通常の学級に在籍する児童・生徒のうち、4.4%の児童・生徒が何らかの特別な教育的支援を必要としているという調査結果が出ている。</p> <p>A市における平成15年の調査では、小学校で9.12%（370人）中学校で3.84%（74人）の児童・生徒が何らかの特別な教育的支援を必要としているという結果が出た。約6年後の平成22年にA市で再度実施された調査によると、小学校で3.71%（160人）中学校で3.89%（75人）という結果であった。この結果を見て、何らかの特別な教育的支援を必要な子供の数自体が6年前より減少したとは考えられず、おそらく小学校の担任教師の特別な教育的支援を必要とする児童への印象に変化があったのだと考えられる。通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要としていた児童に対して、小学校においては校内組織が整備され、適切な支援を行ったことによって、その児童が適応できるようになってきた結果なのではないかと考えられる。</p> <p>中学校の現状として、行動面で著しい困難を示す生徒に関しては、生活指導部が率先して動き、教職員間の課題意識も高く、校内が組織として支援していく方法が取られている場合が多いと感じられる。</p> <p>一方、生活指導上の問題が見られず、通常の学級内において友達とのトラブルもないため問題が見過ごされているが、学習面での支援が必要な生徒がいる。</p> <p>本研究ではこれらの生徒に対して、学習支援教室の実践を通して、中学校の校内組織の現状と課題、外部機関との連携に関する現状と課題を捉え、中学校における特別支援教育の在り方の最善の形は何かを探っていくことを目的としている。</p>
II 研究の方法	<p>1 対象生徒 校内委員会で学習面での支援が必要な生徒の中から、放課後に個別支援を受けることのできる1年生女子1名を研究対象とした。</p> <p>2 アセスメントの実施 中学校において通常の学級に在籍する生徒が学習上でつまづく箇所と、LD児が学習上でつまづく箇所に共通する所があることから、LD児への支援プログラムが有効だと考え、LDI-Rを用いたアセスメントと観察によるアセスメントを担任教師と共に行った。</p> <p>3 個別の指導計画 学習支援教室と通常の学級での指導が並行するように、担任教師と連携を取り、現段階で実施できる支援の内容で作成した。</p> <p>4 学習支援教室のねらい (1)楽しく学び、成功体験を積み自信をつける (2)安心できる居場所、学習環境をつくる (3)つまづきを読み取り、丁寧に支援していく 以上の3点をねらいとし、全10回にわたって放課後学習支援教室で個別支援を実践した。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>10月12日に作成した個別の指導計画に沿って、学習指導を行い、学習支援教室担当者と担任教師とで話し合い、12月22日には評価についての記述をすることができた。</p> <p>放課後学習支援教室での実践について、対象生徒が10月5日～12月22日の間、全10回一度も休まず、また、遅刻もせずに参加することができた。</p> <p>放課後学習支援教室を進めるにあたって、3つのねらいを挙げたが、(1)の楽しく学び、成功体験を積み自信をつけるに関して、オセロやビンゴなどのゲームを導入として取り入れたことにより、楽しく、リラックスして次の学習課題にも取り組むことができた。(2)の安心できる居場所、学習環境をつくるに関しては、個別支援の1回目と10回目の記録を比べると、笑い声や冗談も多く飛び交うようになるなどの変化が見られた。学習課題の中で分からないところは、担当者に聞くことができた。(3)の対象生徒の学習面でのつまずきに関して、漢字の書きは、小学校中学年程度の定着には至っておらず、特に画数が多くなると間違える傾向にあるため、視覚的記憶の苦手さが考えられる。</p> <p>漢字の読みは、小学校中学年程度の力はあるが、前後の文章から読みを予想し答えを書いていることがある。答えを書く時に最後の1文字を抜かしてしまう時があり、作業記憶の弱さも考えられる。</p> <p>文章表記に関して、「お」と「う」、「ず」と「づ」、「い」と「ゆ」、を間違えやすく、聴覚から入った情報を書字に表す際につまずきがあると考えられる。</p> <p>促音や拗音も書き忘れる時がある。「てにをは」や「～に」「～が」「～は」などの助詞も書き間違える時があり、注意力の不足が伺える。</p> <p>4つの文章を読んでから時系列に並べる問題が解けず、4つの文章を覚えておく短期記憶が弱いと考えられる。また文章が合っているかどうか点検する力も弱く、メタ認知能力も弱いと考えられ、その為、スモールステップで2文ずつに分けて答えさせたり、絵を提示して場面を想起させたりすることが有効であった。</p> <p>作文したり文章を想像することは早くできるが、年齢相応の内容とは言い難く、経験の不足やメタ認知能力の弱さが考えられる。</p> <p>文章の前後の意味を理解し、適切な接続語について十分理解できている。文末が肯定や否定になる文章や、現在形や過去形の文章も理解できている。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>対象生徒への指導については、今後も小学校中学年程度の文章に触れる機会を多くもち、語彙を増やせるように支援していく。</p> <p>二桁の足し算・引き算に関しては十分な力が付いてきているし、かけ算九九や二桁のかけ算も筆算の形を取れば解けるようになってきたので、今後は割り算に取り組みせていきたい。</p> <p>ローマ字では、パソコンへの興味関心が高いので、ローマ字入力を通して学習を進めていきたい。</p> <p>本校の校内委員会の現状として、毎週1回開かれているが、支援の必要な生徒に関してのアセスメントや具体的な支援策を立てていくことが不十分である。保護者との連携に関しても、子供が支援を必要としていることを了解してもらうことに難しさがある。特別支援教育コーディネーターは、今年度、特別支援学級の担当者が任命されているが、担当学級の生徒達への指導があり、通常の学級へ出向き情報を得る機会を作ることの難しさがある。外部機関との連携についても、生徒の問題が生活指導なのか特別支援なのかの精査がされておらず、巡回相談への依頼を躊躇している。</p> <p>特別支援教育コーディネーターが通常の学級へ出向いて情報を得る機会を作る為には、特別支援教育コーディネーターを複数指名にし、時間割の調整や校内の人的資源を有効活用することが望ましいと考える。</p> <p>今後、専門家チームによる巡回相談を定期的に依頼し、アセスメントと具体的な支援策を講じることが、通常の学級に在籍する生徒への個別支援と学習支援教室の指導内容を豊かにすると考える。</p>